

俺と彼女の時間旅行

みたちゃ

<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=5133973>

6,369 字 13 分钟

子供になるシリーズ書いたので、せっかくですから逆バージョンも書こうと思いました！
ゆきのんの話も書くことができてよかったですっ!!

個人的には一通り俺ガイルのメンバーをヒロインにしたのを書きたいっ

俺ガイル見ました!!動きがなめらかでしたねっ
がまちゃんもゆきのんも可愛すぎますっ

ゆきのんが八幡を追い出すのではなく、戸部っちを追い出そうとしたシーンはなんかもうよかったっすゲッ!(*~*)
早くいろはすが見たい見たい

2015 年 4 月 4 日下午 4 点 41 分

「ん」

なんだか視線を感じて意識を取り戻す。闇一色の世界に一瞬驚くも、寝ていたということを理解するま
でにはそう時間はかからなかった。

暗い視界の中そのまま目を開けることなく再度眠りに入ろうと思ったが、どういう状況で眠っていたの
か覚えていなかったのも、俺はゆっくりと重い瞼を開くことにした。

「...は？」

そこには驚くべき世界が広がっていた。細くなっていた目はしっかりと開き、寝ぼけていたあらゆる
機能が目を覚ます。

しかし、だからこそ俺は全機能に命じる。ああこれはきっと夢か。俺...変な夢見るなよ。そう思い再
び現実からフェイドアウトしようとした時、



パーンと俺の頬が快音をならす。

「まったく....あなたは どうして二度寝ばかり....」

「いったあ....夢じゃないのかよ」

俺が驚くのも無理もない。なぜなら眼前に雪ノ下がいたからだ。その距離わずか数 cm。お互いの鼻と鼻がくっつく距離である。そして実際には身体が密着している。つまり抱きつかれているのだ。

状況を理解して、すぐに後ろへと距離を取る。椅子ががたと大きな音を鳴らすが、雪ノ下は微動だにしない。いや、状況を理解しているとは言えない。だってこの状況は意味がわからないからだ。

「え、なにこれ」

「？」

驚いている俺に対し、目の前にいる雪ノ下は何を驚いているの？みたいな顔でこちらを見つめる。

なんとか冷静さを取り戻し、雪ノ下がおかしくなったのか確認のためじっと見つめる。



雪ノ下もこちらをじっと見つめるため目が合ってしまう。数秒後、俺は耐えられなくなり目を逸らす。
しかし妙な異変に気付くには十分な時間だった。

「お前....雪ノ下雪乃か？」

「ええ。厳密には少し違うけどあってるわ。あなたは....比企谷八幡でいいのかしら？」

「そうだ」

お互いに納得が言っていないために確認を取る。妙な点とは俺から見て、外見的な面で雪ノ下雪乃とは少し違うところだ。

お前は雪ノ下雪乃の何を知っているのかと問われれば恐らく何も知らないと答えるだろう。しかし、少なくともほぼ毎日顔を合わせている。だからわかるのだ。

「あなた....少し子供っぽいわね。なんとなく幼さを感じるわ。でも似てる。....もしかしてあれかもしれないわね」

俺の知っている雪ノ下雪乃よりも、顔つきが大人びている。髪は以前より少し短めで、陽乃さんとはまた違ったよさがある。そして一番の問題は....



「胸が少し出ている....」

「あら、失礼ね。姉があれなのだから、私にだって成長があるわよ」

彼女は目を細めむつとした表情を見せる。どうやら心の声が出ていたらしい。全体的に見るとわかるのだが平均的にはある。

きっと由比ヶ浜当たりならこう思うだろう。そう、これはまるで雪ノ下雪乃を大人にしたような....そんな感じだ。

そんな俺の心を読んでいたかのように、彼女は微笑みながら言う。

「そう。どういう原理かはわからないけど、私は未来から来た雪ノ下雪乃よ」

「....やっぱりそうなのか」

「あら、あんまり驚かないのね」

「まあ、な」

内心はかなり驚いている。未来からやってきたなんてアニメか漫画の話だ。だから目の前の彼女が嘘をついている可能性は極めて高いが....俺はなぜか信じている。疑い深いはずなのに何故か。



成長した雪ノ下と聞いて違和感がない。雪ノ下をこのまま成長させたらこういう感じだろうな。という想像とまったく一致していたからだ。....一部を除いて。

「だから姉はあれなのだから仕方ないのよ」

頭の中を読む能力は今でも変わってないらしい

「もしかしてお前本格的に超能力手に入れた？」

彼女は呆れ果てて、わざとらしく大きな溜息を吐く。

「あなたが何度も私の胸を盗み見るからよ」

あれ？ そんなに見てた？ 言っておきますけど成長したからと言って、慎ましいのは変わりませんからね？

「紅茶....入れるわね」

「お、おう」

一瞬俺に鋭い目つきを向ける。やっぱり心読む回数多くね？



简单扫描
百度网盘出品



彼女はすっと立ち上がり、覚えているかのようにマグカップの位置まで行くと、それぞれのカップを取り出し手馴れた手つきで注いでいく。

「そう言えば、雪ノ下は何年後から来たんだ??」

「四年後ね。今は大学3年生よ」

「ずいぶん変わったな」

「そう?」

四年後はこうなるのかと思うと、人はやっぱり変わっていくものだ。一つ一つの動作には一種の美しさが見られ、それでいてその一つ一つはどこか柔らかい。そんな動作だからどうしても目で追ってしまう。

「でも....きっと今のあなただからそう感じるのよ」

「ん?」

「な、なんでもないわ」



彼女がボソッと呟いた言葉は一瞬で空気に溶け込む程の音量だったためよく聞こえなかった。

「どうぞ」

「どうも」

雪ノ下が作った紅茶が机の上に、音一つ立てずに置かれる。

俺の所に置くと、彼女は定位置である向かい側に座る。そんな様子を横目で見つつ、猫舌な俺は火傷をしないように慎重に紅茶を口の中に運ぶ。

「....上手い」

それもかなりおいしい。高校生の雪ノ下の入れる紅茶とはまた違った味である。同じ物を使ってこうまで違うものかと思わず感嘆するほどだ。

「もしかして....昔の私と比べたの？」

「ああ」



「当たり前じゃない。高校生の頃ではなくこの私だから出せる味なのよ？」

口に指を当てくすりと笑う。まただ。

身体的な成長とはまた違う違和感を感じ取っていたがようやくわかる。

目の前にいる雪ノ下は感情を堂々として出している。表現豊かと言った方がいいかもしれない。その結果、より可愛らしく、より美しく、より艶かしい。

「結構変わるもんなんだな」

なぜだか自分の声が震えるのがわかる。変わることを否定しているのか。

「そうかしら？でも周りにはあまり変わっていないわ。今でも由比ヶ浜さん達とは仲良くしているわ。そして変わったと言うならば三浦さん達とも仲良くなったことね」

あんま変わってないわけじゃないかねーか。犬猿の仲だったのに。だいぶ変わってんじゃないかねーか。

「でも一番変わったのは....あなたよ、比企谷くん」

「おれ？」

ぼっち脱却したのだろうか。それとも憎むべきリア充になったのだろうか。いや、それとも戸塚と....。

「だってあなたはわた....いえ、やめておきましょう」

「なんでだよっ」

「やっぱり未来の事をいうのはタブーだわ。それが未来を変えてしまうかもしれないから」

「じゃあ俺が将来ちゃんと専業主婦になれてるのか聞くのもだめなのか」

「そうね....些細な事でだめだわ。それになれていないと言っても可哀想なだけなもの」

「いや、言ってんじゃねーかよ」

なんなのこいつ。完全に俺で遊んでるだろ。

すると楽しげにしている雪ノ下(未来)はゆっくりと俺に近づき華奢な手を伸ばす。

「はひふふんはよ」

「見てわからない？あなたの頬で遊んでいるのよ」



つついたり、伸ばしたり、押さえ込んだりと口元を緩ませながら俺の頬をいじる。

「やっぱり肌触りが少し違うわね....もうちょっと柔らかい気がするわ」

「そりゃ自分で柔らかいとは思うが、マシュマロよりは硬いぞ」

俺の言葉にぽかーんとした表情を見せると、すぐに体を縮めて、プルプルと震えながら必死に声を押さえている。何か変なことを言っただろうか？

「ふふっ。比べたのはマシュマロではないのだけど....まあこれもしずれわかる事だわ」

そこからも他愛のない雑談をしていた。

口数の少ない俺たちもこの時ばかりはおしゃべりの部類に入っていたかもしれない。

平塚先生の未来を聞いて、雪ノ下は答えなかったが表情が全てを物語っていた。あれ程に顔を引き攣らせた雪ノ下を見るのは初めてだった。平塚先生....俺が貰ってあげましょうか。

戸塚が実は女の子だという事実は判明していないとか。....なんでだよ。あんなに可愛いのに。

ドラえもんはまだ生まれてきていないとか。なんだかんだでいろいろ聞いた。

どれくらい話していたのかはわからない。

長かったような、短かったような。少なくとも時間感覚を忘れるぐらいには話にのめり込んでいた。



その間も目の前の彼女は....冷静な彼女をベースにしながらも時折表情豊かな彼女が顔を見せていた。

「随分と話し込んでいたのだけれども....どれくらい経ったのかしら」

そう言うと彼女はカップに残った紅茶を飲み干すと、ゆったりとした動作で立ち上がり時刻を確認する。

確認すると彼女は表情を曇らせる。

「もう....お別れかしら」

その言葉を境に、少しずつ....少しずつ彼女の姿が手足から光の粒子となって消えていく。

「名残惜しいけれど、私にも待っていてくれる人がいるから。さすがに待たせるわけにはいかないわ」

彼女は俺を見据える。今果たして彼女が見ているのは今の俺なのだろうか。それとも違う誰かなのかはわからない。

「最後に一つ....いいか？」

「ええ」

俺は最も気になっていた事がある。どうせはぐらかされるかもしれないがそれでも問いたい事がある。
これはいつの間にか俺の根幹にある一つになっているからだ。

俺は深く息を吸うと、ゆっくりと言葉を紡ぐ

「俺は....お前を....助けられたのか？」

それはかつてもう一人の部員と、目の前にいる少女が俺に頼んだ言葉だ。柄にも無く俺はその事をずっと気にかけていた。別にそんな場面がないなら別に構わない。

しかし仮に....助ける場面があったなら....それを救うことが出来たのか。

恥ずかしいから言葉には出来ないが今の自分ならなにがなんでも....例え雪ノ下のいう嫌いなやり方を使ってでも、必ず助け出す。

しかし未来の自分ははどうだろうか。雪ノ下もここまで変わったのだ。もしかしたら俺は悪い方向に....助けない方向に変わったという可能性もある。

「それは答えられないわ」

彼女が熟考すると、はっきりとした力強い言葉が返ってくる。と言うことは場面には遭遇したが、だめだった....と悪い考えが頭をよぎる。

そんな俺の心を読み解き、それを払拭するかのように優しい表情、優しい声色で言う。

「でも....これだけは言えるわ。私は今幸せよ....あなたのおかげでね」

それは今まで見た表情よりも、ずっとずっと綺麗な表情だった。

「」

言葉が出ない。その代わりに素直な涙がぼろぼろとこぼれ落ちる。頬を伝い、床に落ちていく。俺はその一連の流れを止めることができない。心にはただ一つ『よかった』と、俺が変えることができたのだと。

きっとそういう涙だろう。



简单扫描
百度网盘出品



視界がボヤけているせいもあるが、もう目の前の雪ノ下はうっすらと見える全体像はあるがはっきりとした部分は顔だけしか残っていない。

「そう言えば....高校生のあなたとはキスしたことがないわね」

見えない足で近づき、その言葉が言い切られると同時に、俺の唇は危険物を扱うかのように彼女の唇によって、そっと、慎重に、丁寧に塞がっていく。

俺は抵抗すること無く流れに身を任せた。

わずか数秒。紅茶の香りが鼻腔をくすぐり、触れるだけのキスを落とす。

そして視界から消えていなくなった。

未来の雪ノ下が消えたその瞬間、高校生の雪ノ下が未来から帰ってくる。当然、未来の雪ノ下がここで居た場所に、未来へ行っていた雪ノ下が上書きするかのように現れる。

つまり....。

「「」」

俺と雪ノ下の距離はゼロ距離。

唇はまだ間髪なしで塞がれたままである。

柔らかく、温かな感触が伝わってくる。

状況を理解するのには少し時間がかかった。

お互いすぐに身を引く。雪ノ下は柄にも無く指をもじもじさせ、恥ずかしがりながら視線を泳がせる。

かくいう俺の方も体温が上昇し、雪ノ下を見られなくなっていた。

俺と雪ノ下は目を見ないように、しかしお互いに背を向けないように後ずさりしながら移動し、定位置に座り込む。

「....」

「....」

無言の空間。チク、タク、チク、タクと規則的な時計の音がやけに響く。周りから見れば肌寒く、寂しげな空間に見えるかもしれないが、俺としては少し暑く、妙な高揚感がある。

「あの」

「えっとだな」



数分間の沈黙を破ろうとした言葉は被ってしまう。

そして....きつと言いたいこともほとんど被っているのだろう。

「ねえ」

「なんだよ」

「も、もしかして....未来の私が来たの？」

「ああ、お前も、その、なんだ。

未来の俺とあったんだな？」

「ええ....なんだか今のあなたと全然違っていたわ」

「俺も会ってそう思った」

お互い言葉には緊張さが備わり、ギクシャクしている会話になっている。理由はなんとなくわかる。

俺と雪ノ下は勘づいているのだ。

未来の自分と雪ノ下の関係に。



俺はふと思い出す。今日、未来の雪ノ下と話した事を。

『まったく....あなたは どうして二度寝ばかり....』 今までで俺は雪ノ下の目の前で何度も二度寝をしたことはない。それに彼女は確かに抱きついていたのに、それがさも当たり前のように顔色一つ崩さなかった。

『当たり前じゃない。高校生の頃ではなくこの私だから出せる味なのよ?』

その味はまるで俺の好みそのものだった。熱さも猫舌の俺には絶妙な加減だった。

『そう言えば....高校生のあなたとはキスしたことがないわね』 つまりそういうこと。

視界の端で、動きがあったので思考が中断する。

雪ノ下は未来の彼女が歩いた道を進み、俺の元までやってくる。

雪ノ下も未来の俺から何かを聞いたのだろう。彼女は顔をりんごのように染めながら、見たことのないような笑顔を浮かべる。



「私を....幸せにしてね」



附机翻：我和她的时间之旅

=====

因为写了成为孩子的系列，所以难得也想写个反版本！

能写出幸乃的故事真是太好了！！

就我个人而言，我写了一篇以我所在的成员为女主角的文章。

我看到了！！动作很流畅。

嘎哈马和幸乃都太可爱了

幸乃不是要赶走八幡，而是要赶走户部爷的场景真是太好了！（*・～
・*）و

想快点看到伊吕波苏。

我很在意！

还有，八幡只是个帅哥（笑）

关注者超过了 50 人！！谢谢大家！！

=====

“嗯。”

感觉到了视线，恢复了意识。虽然一瞬间对漆黑的世界感到惊讶，但没过多久就明白自己在睡觉。

在昏暗的视野中，我本想再睡一觉，但因为不记得自己是在什么情况下睡着的，所以决定慢慢睁开沉重的眼皮。

“....呢?”

那里有一个惊人的世界。眯起的眼睛睁开了，睡眠惺忪的所有机能都苏醒了。

但正因为如此，我才命令所有机能。啊，这一定是梦吗?我……别做奇怪的梦。当我想再次从现实中消失时，

啪的一声，我的脸颊发出悦耳的声音。

“真是的....你怎么老是睡回笼觉....”

“我说了....这不是做梦吗?”

我惊讶也是理所当然的。因为雪下就在眼前。距离只有几厘米。是彼此鼻子和鼻子贴在一起的距离。而且实际上身体是紧密相连的。也就是说被抱着。

理解状况后，立刻向后拉开距离。椅子发出“咣当”的巨大声响，雪下却纹丝不动。不，不能说理解了状况。因为我不明白这种状况的意义。

“咦?这是什么?”

“?”

面对惊讶的我，眼前的雪下又在惊讶什么呢?用这样的表情盯着这边。

好不容易恢复了冷静，为了确认雪下是否有异常，一直盯着看。

雪下也目不转睛地盯着这边，四目相对。几秒钟后，我忍不住移开了视线。但这段时间足够让他察觉到奇怪的变化。

“你....雪之下雪乃?”



“嗯，严格来说有点不一样。你在....比企谷八幡可以吗？”

“没错。”

因为双方都不能接受，所以要进行确认。奇怪的地方就是在我看来，她在外表上和雪之下雪乃有些不同。

如果有人问你知道雪之下雪乃什么事，你大概会回答什么都不知道吧。但是，至少几乎每天都见面。所以我知道。

“你....有点孩子气啊。总觉得很幼稚。不过很像。....也许就是那个吧。”

她的表情比我认识的雪之下雪乃还要成熟。头发比以前短了一些，和阳乃小姐又不一样了。最大的问题是....

“胸有点露....。”



“哎呀，真失礼。姐姐都那样了，我也有成长吧。”

她眯起眼睛露出不高兴的表情。看来是说出了心声。从整体上看是可以理解的，但平均来说是有的。

如果是在由比海滨，一定会这么想吧。对，这简直就像把雪之下雪乃长大成人了一样....就是这种感觉。

她似乎看穿了我的心思，微笑着说。

“对，虽然不知道是什么原理，但我是来自未来的雪之下雪乃。”

“....果真如此吗？”

“哎呀，你不怎么吃惊啊。”

“这个嘛。”

内心相当吃惊。“从未来来的”，这是动画片或漫画里的故事。所以眼前



的她很有可能在说谎....不知为何，我相信。应该是多疑的我。

听到长大的雪下，毫无违和感。就这样在雪下成长，大概就是这样的感觉吧。这与我的想象完全一致。……除了一部分。

“所以说，姐姐就是那样的人，没办法。”

读懂头脑的能力好像到现在也没变

“难道你真的拥有超能力了？”

她惊呆了，故意重重地叹了口气。

“因为你经常偷看我的胸部。”

咦?看了那么多?话说在前头，虽说成长了，但谨慎是不会变的吧?



“可以泡红茶吗？”

“哦，哦。”

一瞬间用锐利的眼神看着我。读心的次数还是很多的吧？

她倏地站起来，像是还记得似的走到马克杯的位置，熟练地取出各个杯子倒了进去。

“这么说来，雪下是几年后才来的？？”

“四年后，现在是大学三年级。”

“变化真大啊。”

“是吗？”

一想到四年后会变成这样，人还是会变的。每一个动作都能看到一种美，而每一个动作都有一种柔和。因为是那样的动作，所以无论如何都要用眼睛追着看。

“但是....一定是因为现在的你才会有这种感觉。”

“嗯？”

“没什么。”

她喃喃自语的声音瞬间就融入了空气，我听不太清楚。

“请进。”

“谢谢。”

雪下做好的红茶无声地放在桌上。



放在我那里，她坐在固定的对面。我一边斜眼看着他的样子，一边小心翼翼地吧红茶送进嘴里，以免烫伤他。

“....好。”

那个也相当好吃。和高中生在雪下泡的红茶又是另一种味道。不禁让人感叹，同样的东西竟然有如此大的差异。

“难道说....和以前的我比了？”

“哦。”

“那是当然的。不是高中时代的味道，而是现在的我才能做出来的味道。”

手指贴在嘴边扑哧一笑。又来了。

虽然感觉到与身体上的成长不同的违和感，但总算明白了。



眼前的雪下，可以堂堂正正地表露感情。或许应该说是表现丰富。结果，更可爱，更美丽，更娇艳。

“变化真大啊。”

不知为何，她知道自己的声音在颤抖。是在否定改变吗？

“是吗？不过周围没怎么变。现在我和由比滨她们的关系还很好。要说有什么变化的话，就是和三浦她们的关系变好了。”

怎么可能没变呢？明明是冤家。不是很奇怪吗？

“不过变化最大的是....，比企谷同学。”

“我？”

是摆脱了孤独吗？还是变成了令人憎恨的现充？不，还是户冢和



“可是，你不交，还是算了吧。”

“为什么啊？”

“说未来的事还是禁忌，因为那可能会改变未来。”

“那你也不能问我将来能不能当个好家庭主妇吗？”

“是啊....一点小事也不行，说不习惯也太可怜了。”

“不，我不是说了吗？”

这家伙是怎么回事?完全是在玩吧。

于是开心的雪下(未来)慢慢地靠近我，伸出了纤细的手。

“哈哈。”



“看不出来?我在玩你的脸颊。”

一会儿戳我，一会儿伸长我，一会儿按住我，他一边咧着嘴摆弄我的脸颊。

“手感还是有点不一样呢....感觉更柔软一些。”

“你自己觉得很软，但比棉花糖还硬。”

他对我说的话一脸茫然，立刻缩起身子，一边颤抖一边拼命压低声音。说了什么奇怪的话吗？

“呵呵，虽然比的不是棉花糖，....嘛，这个早晚也会明白的。”

从那里也闲聊了几句。

原本沉默寡言的我们，这时或许也算是聊天的一类了。



问起平冢医生的未来，雪下虽然没有回答，但表情已经说明了一切。我还是第一次看到脸那么抽搐的雪下。平冢老师....我给你拿吧。还不知道户冢其实是女孩。.....为什么啊?明明那么可爱。哆啦 a 梦还没有出生等等。问了很多这样那样的问题。

不知道说了多久。

好像很长，又好像很短。至少沉浸在谈话中，忘记了时间的感觉。

在此期间，眼前的她由....以冷静的她为基础，偶尔也能看到表情丰富的她。

“我们聊得很起劲，....不知过了多久。”

说着，她喝干杯里剩下的红茶，慢悠悠地起身确认时间。

确认后，她的表情阴沉下来。

“已经....分手了吗?”



以这句话为界，逐渐....她的身影一点点从手脚变成光粒子消失。

“虽然有些舍不得，但我也有在等我的人，不能让他们再等了。”

她盯着我。现在她看到的真的是现在的我吗?还是不知道是谁。

“最后一个问题....可以吗?”

“嗯。”

我最在意一件事。反正也有可能被骗，但还是有想问的事。因为不知不觉间，这已经成为我的根基之一。

我深吸一口气，慢慢地编织语言。

“我....救了你....吗?”



那是另一个社员和眼前的少女曾经拜托我说的话。我一直很在意这件事。如果没有那样的场面也没关系。

但是假设....如果有帮助的场面的话....你能救那个吗?

因为不好意思，所以说不出话来，但如果是现在的自己，什么都可以....即使使用雪下所说的讨厌的方法，也一定要救出来。

但未来的自己会怎样呢?雪下也变了这么多。也许我在向坏的方向发展....也有可能是向不帮助的方向转变。

“我无法回答。”

她深思熟虑后，回复的是清晰有力的话语。虽然场面遇到了，但是不行....脑中闪过这样不好的念头。

他解读了我的内心，用温柔的表情、温柔的声音说，仿佛要消除我的内心。

“不过....我可以这么说。我现在很幸运....多亏了你。”

那是一种比以前见过的表情更美丽的表情。

“ ”

说不出话来。取而代之的是真诚的泪水。顺着脸颊掉到地板上。我无法阻止这一连串的流程。心里只有一个‘太好了’，是我能改变的。

一定是这样的眼泪吧。

可能是视野模糊的缘故，眼前的雪下依稀可见全貌，清晰的部分只剩下脸了。



“这么说来....我还没和高中生的你接吻过呢。”

我用看不见的脚靠近她，在她说出这句话的同时，我的嘴唇就像对待危险物品一样，被她的嘴唇轻轻地、慎重地、小心翼翼地堵住了。

我没有抵抗，任凭潮流发展。

只有几秒钟。红茶的香气扑鼻而来，轻轻一触的吻落了下来。

然后从视野中消失了。

未来的雪下消失的瞬间，高中生的雪下从未来回来了。当然，未来的雪下在这里的位置，就像覆盖了前往未来的雪下一样出现了。

也就是....。



“ ‘ ’ ”

我和雪下的距离是零距离。
嘴唇还没过多久就被堵住了。
传来柔软、温暖的触感。

我花了一些时间才理解情况。
双方立刻抽身而退。雪下毫无花样地扭动着手指，害羞地移开视线。

说着，我的体温也上升了，看不见雪下了。

我和雪下避开对方的视线，但也不背对对方，一边后退一边移动，最后在固定的位置坐下。

“ ”

“ ”

无言的空间。嘀嗒、嘀嗒、嘀嗒、嘀嗒，有规律的时钟声响起。在周围的人看来，这是一个寒冷而寂寞的空间，但对我来说，却有一种莫名的



简单扫描
百度网盘出品



兴奋感。

“那个……”

“嗯。”

想要打破几分钟的沉默的话会被蒙住。

然后....一定是想说的话几乎都蒙上了吧。

“嗯。”

“怎么了?”

“难道是....未来的我来了?”

“啊，你也是，那个，怎么回事?
和未来的我相遇了吗?”

“哎....总觉得和现在的你完全不一样。”

“我也是这么想的。”

双方的语言都带着紧张感，对话变得有些生硬。我大概知道原因。

我和雪下已经察觉到了。

面对未来的自己和雪下的关系。

我突然想起来。今天，和未来的雪下说话的事。

“真是的....你怎么老是睡回笼觉....”至今为止，我还没有在雪下的眼前睡过几次回笼觉。而且，她明明紧紧地抱住了我，却一副理所当然的表情。

“那是当然的。不是高中时代的味道，而是现在的我才能做出来的味道。”

那味道简直就是我喜欢的味噌。对我这个爱吃猫舌的人来说，热度也是恰到好处。



“这么说来.... 我没和高中生的你接吻过呢。”

视野的尽头有个动作，让他的思考中断了。

雪下沿着未来的她走过的路，来到我身边。

雪下也从未来的我那里听到了什么吧。她把脸染得像苹果一样，脸上浮现出从未见过的笑容。

“请给我.... 幸福。”

